



海外で活躍する建設コンサルタント技術者が、独特の目線で各国を紹介するコーナーです。

OVERSEAS

Federated States of Micronesia

— ミクロネシア連邦 —

海外事情



小さな島々の大きな魅力



速水 徹 HAYAMI Toru
中電技術コンサルタント株式会社
水力部 海外プロジェクト



生頼 直樹 ORAI Naoki
中電技術コンサルタント株式会社
水力部 海外プロジェクト

はじめに

当社は中国電力グループの一員として総合建設コンサルタントの知見を活かし、幅広い技術サービスを提供しています。国内の人口減少に起因する市場縮小リスクへ対応するため、当社は海外市場の開拓を目指し2021年に海外プロジェクトを設立しました。海外プロジェクトは水力部内に設置し、当社が得意とする水力発電ならびに配電設備の調査・計画・設計を基軸とした海外コンサルティング業務の受注拡大を目指して活動しています。また、近年の生成AIの急速な発展に伴うコンサルティング市場の変化に備えるため、国内外の企業と協業し、海外水力発電事業への出資(1件当たり数億円規模)を目標とした活動もしています。当社はこうした取り組みを通じて、海外水力発電市場での新たな成長機会を模索しています。水力発電ならびに配電分野での事業拡大や海外市場での成長を目指す企業様がおられましたら、ぜひ当社までご連絡ください。

上記取り組みの一環で、中国電

力・中電技術コンサルタントJVは経済産業省のプロポーザルに参加し、ミクロネシア連邦における再生可能エネルギー(太陽光、水力)マスタープラン策定業務を受注しました。当社は水力発電および太陽光のポテンシャル調査を担当し、現地電力会社の技術者に対するヒアリング、既設発電所サイトの調査、ポテンシャルサイトの抽出を行いました。本稿では合計約30日間の現地滞在で見たミクロネシア連邦の様子をご紹介します。

概況

ミクロネシア連邦は赤道の北、西太平洋に位置し、大小607の島々を4つの州に区分した集合体で形成されます。総人口は約11万5千人です。今回の業務では、ダイバーの聖地と呼ばれるウェノ(Weno)島(島の北端から南端まで車で30分程度の大きさの島)および首都を擁するポンペイ(Pohnpei)島(車で島を一周するのに2時間半程度の大きさの島)の2島が対象地でした。

移動

日本からはグアムを経由して、アイランドホッパーと呼ばれる航路で目的の島に向かいます。アイランドホッパーはグアムーハワイの間で運行される航空便で、途中の主要な島々を次々と経由して飛行しています。経由地の島では、飛行機を一旦降りて出発ロビーまで行くこともできます。乗り継ぎを含めると、関西国際空港からポンペイ島までは13時間程度、ポンペイ島からウェノ島までは1時間程度で到着します。

自然環境

とにかく海がきれいです。島は環礁に囲まれており、環礁の内側は水深も浅いため、波は穏やかです。そのため、海際には護岸がありません。環礁が天然の防波堤となり、高潮が発生することもほとんどないと言います。空港島以外では護岸を見ることがなく、人と海の近さが魅力です。島の周回道路を走ると、視界いっぱいに広がる穏やかな海原の開放的な景色が心を解き放ちます。



写真1 ミクロネシアの海

ポンペイ島は火山を起源とする島です。そのため、規模はさほど大きくありませんが島には多数の滝が存在します。いくつかの滝は観光スポットになっています。

ポンペイ島は平均年降水量が約4,900mmと言われており、世界有数の降水量を誇る島です。雨の降り方は東南アジアにおけるスコールに似ています。急に空が暗くなったかと思えば激しい雨が大地を叩きつけますが、30分後には澄み渡る青空が戻り、自然のリズムを感じさせます。

文化

ミクロネシア連邦を構成する4

州はそれぞれ東京ー大阪間ほどの距離があり、異なる文化が発達しています。島ごとに言語も異なるため、異なる島同士が会話をする際には英語が使用されます。そのため、島のどこに行っても英語が通じ、コミュニケーションは容易です。

土地所有権に関する文化も独特です。特に海面所有権の考え方が独特であり、チューク(Chuuk)州およびコスラエ(Kosrae)州では、沿岸の土地所有者がその沖合の海面所有権も主張できることが慣習として公的に認められています。ではどの程度沖合まで所有権を主張できるのかと聞くと、明確には

決まっていないとのことでした。島内の土地についても土地意識が高く、ウェノ島では道路の多くも未だ私有地とのことでした。そのため電柱一つ建てるのも一苦労という状況で、未舗装の道路も多く残されています。陸上であっても海上であっても、プロジェクトを行う際には土地所有者の許可を得ることが課題となります。

島には娯楽があまりありません。退屈しないのかとドライバーに聞いてみたところ、「昔はグアムで仕事をしていたこともあるけれど、あくせくした暮らしが肌に合わずに帰ってきた。娯楽はなくても、焦らずにゆったりできる時間がなによ



写真2 島を取り囲む環礁



写真3 護岸のない水際線

りも楽しくて満足してるんだ」と、海沿いの広い自宅で、娘さんがのびのび走り回っている様子を横目に微笑みながら話してくれました。他にも夕暮れ時、軒先に椅子を出して涼を楽しむ人々の姿があり、そこには刺激よりも穏やかさに幸せを感じる人が日本よりも多くいる印象を受けました。一方で、夜には若者たちが重低音を響かせながらビールを片手にパーティーを楽しむ様子も見られました。

穏やかでフレンドリーな人が多く、街を歩くとみな挨拶をしてくれます。子供たちに至っては2階の窓やすれ違いざまの車窓からも挨拶をしてくれます。ホテルからスーパーまでのわずか数百mの間に、10人以上と挨拶する日も珍しくありませんでした。

日本・米国との関わり

第一次世界大戦後、ベルサイユ条約に基づきミクロネシア連邦の一部を日本が委任統治した時代がありました。委任統治時代には日本人が現地へ移り住み、現地の方

と結婚する人もいたそうです。そのため、今回の調査でも祖父が日本人という方や、苗字が日本人由来である方に度々出会いました。第二次世界大戦時には穏やかな海象も相まり、旧日本海軍の基地が整備され戦略上の要衝となりました。大戦末期のトラック島空襲では多数の軍艦が攻撃を受け、沿岸部に沈没しました。今では海底に眠る艦艇が観光資源となり、ウェノ島ではそれらを間近で体験できるダイビングツアーが観光客に人気だそうです。

第二次世界大戦後は米国が統治し、1986年に独立します。なお米国との間では、軍事・外交権を米国に委ねる代わりに経済援助を得るという自由連合盟約（通称コンパクト条約）を締結しています。そのためミクロネシア連邦は今でも米国と強い政治的つながりがあります。この例として、コロナ禍においてミクロネシア連邦は国境を封鎖しましたが、上記盟約に基づく米国政府からの手厚い資金支援のおかげで、経済活動が停滞して

も不自由なく生活できたとホテルスタッフは話していました。

食事

島では肉や野菜はほとんど生産されていません。魚介類についても島からの栄養供給が乏しいせい、島周辺ではさほど獲れないらしく、自家消費する程度にしか水揚げされていません。スーパーでは輸入された肉や野菜は手に入りますが、野菜は長らくコンテナに入っていたのかしなびた物ばかりで、新鮮な野菜にはなかなか出会えません。スーパーはこのような状況ですが、レストランは独自のルートで食材を入手しているようで、どこのレストランに行ってもおいしい食事が頂けました。食事のジャンルはフィリピン料理、アメリカ料理が多い印象でした。

島内産の食材がほとんどないことから名物料理も数少ないです。そのなかで、ドライバーの一押し料理はマングローブクラブでした。マングローブクラブはその名の通りマングローブ林に生息する体長



写真4 街のお弁当屋



写真5 マングローブクラブ

20cm程度のカニで、島では高級食材として扱われています。調理法は至ってシンプルで、これを蒸して味付けするのみです。ポンペイ島で食べることができます。マングローブクラブの身はたんぱくですが、ミソは非常に濃厚で、すっきりとしたアメリカンビールとの相性

は抜群です。店によりますが、多くの店では前日に予約をする必要がありますので、マングローブクラブをお目当てに行く際にはご注意ください。

また島にはお弁当屋が多数あります。フライドチキン、カレー、バナナのココナッツミルク和えなど、

様々なものが手に入ります。全体的に濃い目の味付けが多いです。おかずとご飯がセットになったものは5ドル程度で手に入り、どれもおいしいものばかりでした。現地調査に行く際は毎朝弁当屋でランチを買って持って行くのが楽しみでした。仕事前の朝9時頃や昼前には多くの人がひっきりなしにお弁当屋を訪れますので、人気のフライドチキンを食べたい場合には売り切れ前に早めに買いに行く必要があります。

おわりに

本調査業務に対して協力的な方がほとんどであり、円滑に業務を完遂することができました。

業務がなければ知ることも訪れることもなかったであろう島国ですが、全ての業務が終わった今では名残惜しさを感じる場所となりました。ゆったりとした時間を味わいたい方にはうってつけの島々ですので、次のご旅行先をお探しの方は候補の一つに加えてみてはいかがでしょうか。



写真6 旧日本軍 高射砲跡地